

アンサンブル ディマンシュ

第 83 回演奏会

2018 年 9 月 23 日(日)

川口総合文化センター リリア 音楽ホール



【プログラム】

モーツァルト 歌劇「皇帝ティートの慈悲」K621 序曲

ハイドン 交響曲第 101 番 二長調「時計」

第 1 楽章: Adagio - Presto

第 2 楽章: Andante

第 3 楽章: Menuetto. Allegretto

第 4 楽章: Finale. Vivace

♪ 休憩 ♪

ベートーヴェン 交響曲第 1 番 ハ長調 op.21

第 1 楽章: Adagio molto - Allegro con brio

第 2 楽章: Andante cantabile con moto

第 3 楽章: Menuetto. Allegro molto e vivace

第 4 楽章: Finale. Adagio - Allegro molto e vivace

【プロフィール】

指揮 平川 範幸



1987年福岡県出身。福岡教育大学音楽科卒業。

上野学園大学研究生〈指揮専門〉にて下野竜也、大河内雅彦の各氏に師事。桐朋学園大学オープンカレッジにて、黒岩英臣氏に師事。また、パーヴォ・ヤルヴィ、沼尻竜典の各氏の指揮講習会を受講。これまでに、音楽理論を中原達彦氏に、ピアノを田中美江氏に師事。

2012年度、新日鉄住金文化財団指揮研究員として、紀尾井シンフォニエッタ東京の下で活動する。2013年度より2年間、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団指揮研究員として、宮本文昭、飯守泰次郎の各氏の下で研鑽を積む。

これまでに、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、オーケストラ・アンサンブル金沢、大阪交響楽団、浜松フィルハーモニー管弦楽団などのプロ・オーケストラを指揮する。また、各地のジュニアオーケストラや学生オーケストラ、吹奏楽団、合唱団を指揮する。




2016年度より、仙台ジュニアオーケストラ音楽監督を務める。

【曲目解説】

今回のプログラムは、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンというクラシック音楽界におけるいわゆる「古典派三大巨匠」が1790年代の10年の間に作曲した作品を作曲年代順に並べました。互いに影響を受けながら同時代を生きた作曲家の作風の違いを聴き比べていただけたらと思います。

この時代ヨーロッパでは、1789年にフランス革命（絶対王政を倒した市民革命）の契機となったバスティーユ牢獄襲撃が起こり、それに対し、オーストリア、プロイセンを中心とした周辺諸国が革命干渉戦争を起こします。そしてフランス軍隊でナポレオンが台頭、1799年には実権を奪いました。この影響により、ヨーロッパ大陸のクラシック音楽は、貴族のみが楽しんでいた時代から、市民も聴き手となる時代へと移行していきます。

作曲年代

	1730年代	1740年代	1750年代	1760年代	1770年代	1780年代	1790年代	1800年代	1810年代	1820年代
モーツァルト (1756-1791)										
				♪ 交響曲第1番 (8歳)			♪ 「皇帝ティートの慈悲」 (35歳)			
ハイドン (1732-1809)										
				♪ 交響曲第1番 (25歳)			♪ 交響曲第101番「時計」 (61歳)			
ベートーヴェン (1770-1827)										
							♪ 交響曲第1番 (29歳)			

モーツァルト 歌劇「皇帝ティートの慈悲」K621 序曲 ハ長調 (1791年)

この曲は、モーツァルトが35歳で亡くなった1791年、「魔笛」と「レクイエム」の合間をぬって、なんと18日で作曲したと言われていています。しかしモーツァルトのオペラの中では比較的評価が低く、あまり取り上げられることがなく、実は私も今回初めて知りました。実在のローマ皇帝ティトゥス(ティートはイタリア語読み)の慈悲深さをたたえたオペラですが、もちろん内容は歴史とは異なります。

皇帝ティトゥスについて少しご紹介します。西暦39年ローマに生まれ、81年に41歳という若さで亡くなりました。先帝である父ウェスパシアヌスの時代にはよく父を補佐し、その死後、79～81年の約2年皇帝となりました。在位中は、ベスピオ火山の噴火、ローマの大火といった災害に見舞われ、積極的に罹災者の救護、施設の復旧に当たるなど、その寛大で人道的な政策により民衆の人氣が高かったということです。災害続きの近年、治世者には見習ってほしいものです。

さて曲の紹介に戻りますと、この序曲の調性はハ長調。ドミソの和音が華やかに鳴り響いて曲が始まり、同じ音型で始めはミ、そして次にソ、最後に上のドと盛り上げていきます。今回のメイン曲、同じくハ長調のベートーヴェン交響曲第1番の冒頭との違いを楽しんでいただけたらと思います。

(mm)

ハイドン 交響曲第101番 二長調「時計」(1793～94年)

当団にとってハイドンの交響曲を演奏するのは今回で4回目です。楽団のおよそ40年の歴史の中で、このペースでいくと全104曲を完奏するにはまだ1000年以上かかることとなります。執筆者の存命中に演奏できるのはせいぜいあと2曲位でしょうか？というのは当団の中でもハイドンは人氣がありません。ほとんど唯一と言ってよいハイドン推進者である執筆者が、前々回(第92番「オックスフォード」)、前回(第100番「軍隊」)に続いて、本文を書くことになりました。

なぜこれほどに人氣がないのでしょうか？交響曲の父として学校の音楽室に肖像画が掲げられていますが、教科書的、膨大な(多すぎる)曲数、大したメロディーもない、どれも皆同じ様、モーツァルトに比べれば段違いのつまらなさ。こんなイメージが強いのでしょうか。確か前回、ザンデルリンク、ラトル、リヒテルといった熱心にハイドンを取り上げる音楽家がいると書いた記憶がありますが、時代は刻々と流れ、その後、もう亡くなったブリュッヘン、アーノンクールを始めとして積極的に取り上げる人が増え、ピリオド奏法、スッキリ表現が主流となった今、間違いなくハイドン復権が顕著になっているといえます。日本でも井上道義、飯森範親、鈴木秀美といった人たちによって、ずいぶん演奏会でも目立ってきました。モーツァルトの超絶的魅力は別格との認識はもちろん持っていますが、最近何となく演奏会頻度が減っていると感じるのは気のせいでしょうか。

ハイドンの魅力は何かといえば、聡明さ、明晰さ、湿度の低さ、アナログではなくデジタル的、リズムの連続と躍動感、頭がすごく切れ明朗快活でいながら嫌味が全くなく、時に上質な優しさ、ぬくもりを感じる友人と話している感じ、目まぐるしく変化するハーモニー、真夏に木陰に入った時のさっと光が遮られそこに瞬間涼風が吹くといったような絶妙感。この感触はその後のメンデルスゾーン、サン＝サーンスにもつながります。つつい書き過ぎましたが、当団久しぶりのハイドン、どこまでそれを表現しきれるか、ぜひご期待ください。今回皆さまの反響が良好で、我々が手ごたえを感じることができれば、次回はニックネームのついていない秀作・力作交響曲群を取り上げられるのではとひそかに思っています。

さて今回取り上げる第101番「時計」は、昔から定番の名作。交響曲の最終完成型のザロモンセット全12曲の中でも特に人氣の高い一作です。曲数も多いハイドン得意の二長調で、名調子をご堪能ください。

(T. S.)

ベートーヴェン 交響曲第1番 ハ長調 op.21 (1799～1800年)

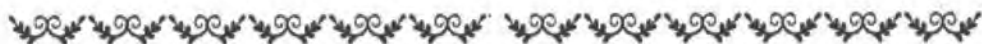
ベートーヴェンは、当団の歴史において最も多く演奏されている作曲家です。交響曲だけでも1、3、5、6、8番は3回。2、4、7番は2回。番外編の9番も入れると計22回の演奏歴があります。もちろん団員が好む作曲家ということもありますが、アンサンブルを向上させたいと思う時、基本に立ち返ってベートーヴェンを、という流れも多かったように思います。交響曲第1番は1980年、1995年、2002年に演奏しており、今回は何と4回目です。その時々が一番良いと思う演奏を目指してきましたが、近年新たな指導者を得て、ディマンシュも団員も年を重ね、また違った景色が見えてきた中での再挑戦です。

今回は、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンという、ウィーン古典派三大巨匠の作品を取り上げました。一番若いベートーヴェンは、16歳のウィーン旅行の際に敬愛するモーツァルトに弟子入りしようとしたが、母親の危篤により帰国を余儀なくされました。22歳の時、ボンに立ち寄ったハイドンに才能を認められて弟子入りを許された後は、ウィーンで多くのピアノ・ソナタや弦楽四重奏等を作曲し、ピアニストとしても名声を博しましたが、交響曲を世に出すことには慎重でした。

交響曲第1番は1800年に完成し、同年4月、29歳の時にブルク劇場における彼の最初の自主演奏会で初演されました。当時交響曲は作曲家にとって特別なジャンルだったため、ハイドン、モーツァルトに続く立場としては満を持しての発表だったのでしょうか。初演の時のプログラムは、モーツァルト「大交響曲」(詳細不明)、ハイドン「オラトリオ『天地創造』」より2曲、自作の「ピアノ協奏曲第1番」改訂稿、「七重奏曲作品20」、ピアノによる即興演奏、そして最後に「交響曲第1番」を披露したようです。ベートーヴェンの交響曲第1番、第2番は、その様式からハイドン、モーツァルトを踏襲していると言われますが、このプログラム構成からは、先人を超える独自の境地を世に問おうとする意気込みが感じられます。しかし、当時は斬新過ぎて聴衆の耳には冒頭の和音からして奇妙に響き、「ベートーヴェンのような天才的な芸術家にはそのような自由な発想は許されてあるべきであるが、大きな演奏会で演奏されるべきものではない」などと酷評されたようです。

初演から218年、今日では不朽の名作として親しまれ、当団にとっても馴染みの深い曲ですが、新鮮な演奏ができればと思います。

(蛙響)



【第83回メンバー】

第1ヴァイオリン	古賀久喜、佐藤克哉、三瓶政一、☆時山響子、西川富之、西村実
第2ヴァイオリン	石嶺寿子、関根佳子、中村文樹、林俊夫、♪森未知
ヴィオラ	柴野かおり、下山純也、♪関口孝司郎、千秋和久、山口彰
チェロ	東郷丞、中山憲一、♪米倉俊郎
コントラバス	江川博之、♪須賀敬亮

フルート	上野京子、谷口玲子、徳植俊之
オーボエ	市川亜理、山口高司
クラリネット	浅井昭成、鈴木千暁
ファゴット	越島康太郎、星野未央
ホルン	大高奈穂子、小磯治、町田明子
トランペット	鴨狩公一、藺部晴信
ティンパニ	星野武徳

☆:コンサートマスター、♪:弦楽トップ

練習指揮	平林遼、山上孝秋
トレーナー	戸澤哲夫(東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団コンサートマスター)



♪ 次回の演奏会ご案内 ♪

日時：2019年2月9日(土) 14:30 開演
場所：彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール
指揮：平林 遼
曲目：モーツァルト 「劇場支配人」K.486 序曲
シューベルト 交響曲第2番
ビゼー 交響曲第1番

詳細はHP <http://www.e-dimanche.jp/> をご覧ください。

※招待券ご希望の方はアンケートにご記入いただくか HP よりお申込みください。



30 歳頃の肖像 (1801 年制作)

今日のアンコールは、

ベートーヴェンのバレエ 「プロメテウスの創造物」から「終曲」

でした。

このバレエは、1800 年～1801 年、本日演奏した交響曲第1番の直後に作曲されました。聞き覚えのあるこの終曲の主題は、後に交響曲第3番「英雄」の第4楽章で使われています。